

特集

# 戦争を体験した私から 戦争を知らないあなたへ

戦後72年となり、戦争体験者の声を聞くことが  
出来なくなってきました。どうか戦争を体  
験したあなたの体験を戦争をしらない  
私たちに伝えて下さい。

山波財団の会員の方々に、「生命の樹」(月刊誌) 2017年4月号で原稿を募集しました。  
この特集頁はそのご投稿によるものです。

- A 体験記 ——— 戦時中のご自分の体験、見聞を、断片的でもかまいませんので書いて下さい
- B 聞き書き ——— 祖父母等から聞かされた戦争中の話、または聞き書き

写真 平野利幸



のです。それがほんとに嬉しくて今でも忘れられません。

そして何ヶ月か経って、ようやく厄介になったその家を出て隣り町の東府中（東京競馬場）の近くへ引越すことが出来ました。

それから一年半位経って小学校へ入学しましたが、始業時と終りの合図が、あの警報のサイレンで、その度に胸がドキドキしました。それに朝礼の時にDDTを吹きかけられて、皆な真白でした。とても嫌な思い出です。それから今でも異常に真赤な夕焼を見ると、あの時のことを思い出します。最近では、糸魚川のあの火事をテレビで見た時、あくあの時の戦争のようだと思いました。幼な時代の記憶でいたことが書けませんが、覚えていることを書きました。

## 〈戦争〉の記憶と体験

静岡県

心のひだ奥深く沈潜し時期がくると浮かび上り、再び沈潜して止まっている決して忘れ去ることの出来ない戦争の記憶を、体験と共に書いて行きたい。これは静岡空襲（1945年6月19日夜半から20日未明）を中心にした半年間の出来事である。

昭和20（1945）年2月下旬、42歳兵役第二乙の父に赤紙（召集令状）が届く。三島（静岡県三島市）砲兵連隊への入隊通知である。父は私にだけ「お父さんに赤紙がくる様ではこの戦争は日本が負けてもうすぐ終るよ。できるだけ早く帰ってくるから大変でも後を頼む」と云う。「一億玉砕じゃあないの？」と問う私に「天皇陛下（昭和天皇）が一億玉砕はさせないよ」ときっぱり答える。その時、「今まで何も云わなかったけれど父は天

## A 体験記

皇陛下を敬愛しているのだ」と感じる。3月始め、父は赤いたすきを掛け、母が用意した千人針と沢山の言葉を書きこんだ日の丸を持ち、集った人達と静岡駅へ向かう。私は家で見送り一日でも早く帰ることを願っていた。

6月に入り一週間ほど過ぎた頃父が帰ってくる。色白だった顔が真黒、目だけギョロギョロしている。ただでさえ痩せていた体はあばら骨が見える程にやせ細っていた。「これでも除隊した時よりは少し太ったのだよ」と云い笑っている。実際に除隊したのは6月1日朝(5月31日が最後)、その儘帰るとお化けに間違えられそうだからと大場(三島市近郊の田舎温泉)に寄り、軍隊で貰った給料を全部遣ってきたと話す。食べて寝てお湯に入ってを一週間続けていたそうである。芋切干しの土産もあった。

そして6月19日夜半。警戒警報で一時間近く防空壕の中に居た時、「ザアー」という音と同時に空襲警報のサイレンが鳴り出す。父がはねのけ

た防空壕の木の蓋は燃え始めている。「お父ちゃんそれじゃあアタマが下になっちゃう」、沈着な父が3歳9ヵ月の弟を背負う時、紐の上下を反対に着けたのである。弟の声を聞きながら私は裏庭へ行き南瓜の葉に落ちた焼夷弾を叩いて消していた。父の声が響く。「○○子何している!」「いま火を消しているところ!」「消さなくていい、逃げるぞ、ぐずぐずしていたら焼け死ぬぞ!」急いで表おもてにまわる。弟を背負った父を先頭に、1歳4ヵ月の妹を背負った母、そして私と12歳の妹、家族6人ひとかたまりになって走り始める。祖母は先に逃げたとのこと。まだ逃げている人は殆どいない。「安倍川へ行くぞ」と云い細い道細い道を選びながら父は走って行く。逃げ始めた頃はいなかった人々が走るに連れとんとん増ふえていく。私は父の背中だけを見詰め唯走っていた。5〜6米空あいた時、一人の若い女性が間に入る。「あー嫌だな、邪魔だな」と一瞬思う。大柄な身重の女性、紫色の銘仙のもんぺの上下を着て一人で走ってい

る。その時、この女性<sup>ひと</sup>は静岡連隊の将校の奥さんだなど感じる。みな家族で逃げている中で一人というのは静岡の人ではないということ、よし！父と私の間に入れて一緒に逃げようと決める。その頃には燃え盛る<sup>さか</sup>焼夷弾の火で彼女の着ている紫の濃淡の花柄まで見える。突然、「ザッザッザァー」という音と共に大量の焼夷弾が降ってくる。大つぶの雨のようだ。すぐ前を走っていた女性がバタッと倒れる。かけ寄ると大きな筒が落ちていて、焼夷弾が入っていた空の筒先が腿<sup>もも</sup>を直撃したらしい。立ち上がることは出来ず言葉も出せず「あそこへあそこへ」という感じで軒下を指差す。引きづろうとしたが私より大きく重くとも一人では動かせない。それを見付けた警防団の男性が走り寄り二人で何とか軒下まで運び戸に寄りかからせる。「どうしよう」と思いながら顔を上げると7、8米先で私を待っていた父が頭を横に振っている。それに気付いた警防団の男性が「いーから行きなさい」と云う。「お願いします」と後を託し

置き去りにする女性に「御免なさい」とあやまつた時、その女性<sup>ひと</sup>は私に両手を合わせ深く頭を下げたのである。既に死を覚悟しているのが分かる。唯、逃げる人々の下敷きになって踏み殺されるのだけは避けなければならぬ、おなかの子供を守らなければならぬと思っているのを感じた。

「火に追われ逃げ行く先につきつぎと敵機より落ちし焼夷弾散る」走りながら口をついて出てきた言葉。降り注ぐ焼夷弾を手で払いながら漸く安倍川の土手下まで辿り着く。母は其処で崩れるように坐ってしまい「もう動けない。お母さんはH子（背負っている妹）と二人で此処で死ぬからあなた達は早く行きなさい」と云う。土手の上に弟を背負った父が待っている。「お母さんが死ぬのなら私も死ぬ」、妹も「じゃあ私も死ぬ」と云い二人で母の両側に坐る。それを見て母は気を震い立たせたらしい、立ち上がろうと体を動かす。私と妹は左右から母を抱え土手を引き吊り上げていく。母は両手で草を掴み何とか這い上がろうとし

## A 体験記

ている。B 29 の攻撃は凄い。低空飛行で人間のカタマリに焼夷弾を投下していく。飛行機の翼のカゲに私達はすっぽり入ってしまふ。土手の上から転るようになり下りて水の中に入る。そしてコンクリートの橋桁のアーチの下まで行く。六月の安倍川の水は腰まであり流れは速い。一人では流されてしまうので皆でアーチを囲み手を繋ぎ合う。右隣りは父、その向うに妹と母、左隣りは知らない中年の男性。それぞれしっかり手を握り合っていた。父が「今夜の空襲が焼夷弾だけならば此処に居れば助かる。もし爆弾を橋に落とされたらその時は諦めるんだな。でもお父さんは焼夷弾だけだ」と思うよ」と云う。

そして——。一瞬、耳を劈く轟音と共に辺り一面真昼のように明かるくなった。川上 200 ㍎ 300 米先に太い火柱が天まで届くかの様に立ちメラメラ燃えている。「B 29 が衝突した！」どこかで叫び合う声が聞こえる。間もなく空が静かになり夜が明け始める。空襲は終わったのだ。

この静岡空襲は、「B 29」140機、死者二千人、重軽傷者一万余人ということを後日知る。

手をつなぎ合った者同志、互いの無事を喜びながらそれぞれ挨拶して散って行く。川中 580 米、いくつかの浅瀬を渡り向う岸へ着く。行き先は母の実家。歩いて行く道と川の間の田圃で B 29 がくすぶっている。みなでそれを見に行く。残骸の中に付根から散切れた白い長い脚がごろがっていた。「こ奴が！こ奴が！」と云いながら二、三人の男性がその脚を踏みつける。それを見ていた時「この脚のお母さんが知ったら悲しむだろうなあ」とふと思う。

朝 6 時過ぎ母の実家へ着く。祖父、祖母、叔母が迎えてくれる。山の上から空襲の様子を見ていた祖父が、「あの火の海の中をよく生きて出ることが出来たなあ」と云う。三人で「駄目だな」と話していた処へ私達が姿を現したのである。

翌々日の 6 月 22 日、「焼跡へ行ってみるか」の

父の言葉で両替町（国鉄静岡駅の近く）の自宅へ向かう。牧ヶ谷橋（安倍川の支流藁科川にかかる木の橋）を渡り安西橋（安倍川橋より400米ほど上流の橋、あんざいばし）を渡り終った頃から屍臭を感じ出す。安倍川を挟んで辺りの様相が激変する。焼死体が点在し中には半焼けの体も見える。十二間道路と呼ばれている広い道に出た時、何故父が細い道細い道を選んで逃げたのかを理解した。人間の形をとどめていない炭素棒にも似た焼死体があちらにもこちらにもごろごろ転っている。落とされた焼夷弾の量と発生した高温がよく分かる。正面交叉点角の長い白壁にくっきり残された五つの小さな黒いシルエツト。右が一番大きく左端が一番小さい。3〜4歳から小学校高学年〜中学一年ぐらいか、上の子供達だけなら逃げられたかも知れないのに小さい弟妹を置いて逃げられなかったのだと分かる。多分お父さんは戦地、お母さんは？と思わずにはいられなかった。7〜8分歩道を進むと痛ましい光景が目に入る。臨月らしい

お母さんのお腹から赤ちゃんが顔を出している。お母さんの体は黒こげだが割れたお腹から出てくる赤ちゃんの顔は白い。羊水に守られたのだ。空襲当日の午後、先に一人で逃げた祖母を捜しに焼跡へ向った父はこれらを見たに違いない。その時には五つの焼死体は在ったのではないか。この状況を見せる為に私を誘ったのだと感じる。

支那事変（1937年7月7日の蘆溝橋事件）が始まると間もなく、店（江戸時代からの米穀商）に来る人達に「よその国（支那大陸）に出掛け人殺しまでして国を大きくすることはしない。小さければ小さいなりにちゃんとやっていけばよい」とか「アメリカと戦争したら日本は必ず負けるよ」と何時も云っていた父。ついに母から「あなた、滅多なことは云わないで下さい。特高に連れていかれたらどうしますか」。「家（うち）でしか云わないよ」。「家でも云わないで下さい。誰が密告するか分からない」と云われて無口になった父を想い出す。それでも二人の叔父（母の弟）と、昭和12（1937）

## A 体験記

年8月下旬、家から静岡歩兵第三十四連隊に入隊して行った三人の新兵さんには「大きい声では云えないけれど、出来るだけ生きて帰って来なさいよ」と云っていたのを聞いている。五人すべて戦死。「これが戦争の結果だよ」父は私にそれを教えてなかったのだと今も思う。

昭和20（1945）年8月15日、私にとっては「敗戦の日」である。「ピン」と張っていた細い糸が私の中で「ブツン」と切れた日。村の人達が大量集ってくる。茶の間と広い土間は人で溢れている。ラジオの無い家は勿論有る家の人達も来たようだ。正午、玉音放送が始まる。天皇陛下（昭和天皇）のお声を聞きながら「この方は話すことに慣れていらっしやらないのだ」と思う。聞きとりにくい声（雑音も入っている感じ）を耳と心を澄まして聴いている。はっきり分かった言葉は、「時運ノ趨ク所堪エ難キヲ堪エ忍ビ難キヲ忍ビ以テ万世ノ為ニ太平ヲ開カント欲ス」だけであった。

皆の中に座って居るのに堪えられずそっと抜け

出し槇の生垣に沿って屋敷の周りを歩き始める。「国破れて山河在り 城春にして草木深し」杜甫の「春望」を口ずさみながら始めて私は涙を流した。8月15日午後一時過ぎ。暑かったけれども山も谷川も木々もそして竹藪も無傷であった。

この時点では全く気付かず、今はっきり分かることは、私の生命は紫色のもんべを着た女性に救われたということ、父の除隊が半月遅ければ家族5人（母、私、弟、妹2人）は焼死体になっていたこと。病弱の母とすぐ下の妹、小さな弟と妹そして私ではとてもあの火の海の中を逃げることはできなかったと思う。私知っていたのは炭素棒がころがっていた広い道だけだったから。

# 戦争の断片的記憶

埼玉県

□近所の家から兄弟三人が戦争に行って、三人とも帰ってきた。うちは女ばかりで男は父一人で、帰ってこなかった。ある日、父と部隊が同じだったと言う人が訪ねてきて、「お父さんもうすぐ帰ってきますよ」というので大喜びで、その人に大ご馳走してお土産まで持たせた。あとで、その人が近所で父や家の事を聞きまわっていた事がわかり騙されたとわかった。しばらくして遺骨（箱の中は空っぽ）が届いた。

□お盆に母の実家で終戦を迎えた。みんな黙ってラジオを聞いて、小さかったのであまりよくわからなかったが、泣いている人もいた。

□空襲警報がなると学校の授業は中止になり、はじめは集団で帰るのに、B29が飛んできて、てんでんばらばらになり最後は一人で逃げながら帰っ

た。

□家の畑に爆弾が落ちた。

## 北朝鮮から引揚げた 10歳の記憶

匿名

昭和20年8月6日頃ソ連軍が満州に侵入してくると通達があり「新京」（今の長春）から北朝鮮に疎開しました。その時はすでに父に召集令状（赤紙）がきていて、いませんでした。母がかなり慌てて、おむつ、食糧、衣類を用意し、私も大変な事になったのだと覚えています。母、長女私（10才）、次女（7才）、3女（3才）、4女（1才）、でした。私が1才の妹をおんぶし、母が3女をおんぶし次女は歩きです。新京駅は人・人で大混雑、召集をまぬがれた少しの男性、老人、子供で皆、不安だった

## A 体験記

と思います。駅のホームには客車がない、石炭を積む箱型の貨車があり、それに乗るのだったのです。乗り込む時は梯子を掛けてまず大人が乗り子供や老人女性の順に乗るのです。石炭車ですからトイレもない、スズで皆、まっ黒です。中は敷物もない、命がけです。とに角早く脱出しないと「殺される」という恐怖があるのです。おむすび2食分と缶詰少々を持っていました。それも食べてしまふと終りです。ある日急に汽車が停つて、女性が恐ろしさに気が狂つて、おろされました。すぐ出発です。

北朝鮮に着いてから歩きが始まり、山道を妹を背負い歩くのです。野宿です。妹や仲間の赤ちゃん、ぐずるとまわりの大人に泣かすな、とおこられます。山の中の道なき道で石ころがごろごろ歩きにくく、足は痛いし、きつかったです。妹はお腹がすき背中ぐずり、もちろん山の中で何もありません。やせ細っていても肩におんぶひもがくいこみ痛かったです。泣くのは、生きているのだ

から、まだいいのです。死んだ赤ちゃんを、おんぶしたお母さんもいた様でした。おろすこと出来ないので。次女は可哀いそうでした。おんぶしてくれる父がいないのですから、父は以前タクシーに乗り事故にあい肋骨を折っていたのに、死ぬために行ったようなものです。

避難する学校の講堂で集団生活が始まります。やはり敷物もない、囲う物もない雑魚寝です。お腹がすいても食べる物はない、たまに大豆の水煮や「こうりやん」という雑穀の配給があり、たべると腹くだします。でもみな我慢してました。

ある夜、空に「フワッフワッ」と炎の様なものが飛んでいて、皆さわいでいました。すぐ消えました。その少し前にお母さんが亡くなり、その赤ちゃんの事を心配して火の玉となって出たのです。大人達は話していました。その赤ちゃんは、お母さんを追うように亡くなりました。

上級生の人達と山に登り、たき木をとりに行くのです。たき木を縄でしぼり、背負っておりの

です。こわかったです。もちろん学校も行ってません。外に出ると石を投げられます。朝鮮の家庭に田植の手伝い、稲こぎをしたり、赤ちゃんのお守をして、ごはんをたべさせてもらうのです。大きな井に入れてくださりおいしかったです。昭和天皇の玉音放送も避難所で聞きました。大人達はひざまずいて泣いていました。母と喜びました。が、なかなか帰る許可が出なくて待ちどおしかったです。次女は栄養失調でとうとう亡くなりました。残念でなりません。母が「父ちゃんが呼んだのだ」と言っていました。

帰られる許可が出て又歩きが始まります。38度線を越えた時山道だったと思います。ソ連の兵隊に鉄砲をつきつけられました。背が高くて、こわかったです。すぐに鉄砲を後にかくしたと思います。山の中の道の両方には遺体があつとごろごろして長く続いていました。つらいです。どうにもなりません。自分達の身を守るのが精いっぱいです。

6人家族で、両親と子供四人で子供心にお父さんがいてうらやましかったですが一家全部亡くなりました。両親が揃っていても助からないこともあるのです。行軍の時足が痛くても、きつくて絶対休憩させてくれません。座ると立てなくなり遅れたら引揚船に乗れないからです。私が歩けたのは、母の一言「父ちゃんに逢える」「父ちゃんが見てる」の言葉でした。この引揚船が最後だと知っていたのでした。

やっと船に乗れたと思ったら、貨物船で荷物を運ぶ船でした。たしか船底迄ビルの3階か4階位の深さで、階段でなく細い梯子の様でした。船底です。寒くて冷たく、甲板に上ると鉄板のように足の裏が熱いのです。しらみが髪の毛につき、肌着の縫い目につき、とって、つぶすのです。「DDT」（殺虫剤）をふりかけます。次はコレラ菌患者が1人出ると五日位上陸が延びるので。何人位出たのかわかりません。ようやく船をおりて今度は引揚列車に乗ります。4人掛の席に

## A 体験記

座り、とても楽でした。お弁当が1人1個配給がありました。(米2、麦8)位で福神漬とタクワンが入っていておいしかったです。

祖母の家に着き、奥の方に小さい灯がついていて、「おばあちゃんは生きてた」とほっとしたのでした。「よく頑張ったね」とほめてくれました。トタン屋根、トタン張りの雨もりのする家でした。七輪でおかゆをたいて、たべさせてくれました。お米が多いと思えました。センベイ布団でした。綿がそれなりに入っているのですから気持が良かったです。

ある日から人がいれ替りに来られるのですが母と私が「父ちゃんが帰ってくる」と先に言うので、話が来ないで帰られるのです。後でわかったのですがラジオで戦死者の名前を放送するのを知らなくて、そう言えば喪服姿で来られたとわかりました。祖母が「実は」と父の事を泣きながら話してくれました。母と2人で大泣きしたのを覚えています。

後に夢に父が出て出征した時の軍服姿で現れて私の顔をじっと見て消えて行きました。「私は父ちゃんだ」と思ってた目が覚めたのをおぼえています。母に夢のことを話すと「ほめに来てくれた」のだと教えてくれました。亡くなった妹が私の着ていたコート、赤いコートでしたが、それを着てお花畑の道を歩いているのです。夢でも安心しました。